ユリ（百合）

名のユリは、茎が細くて花が大きいので、花がゆり動くことに由来している。

「立てば芍薬すわれば牡丹歩く姿はユリの花」と美女の形容によく使われているが、芍薬は立ち姿、美しくすっきりと、牡丹は妖麗な雰囲気を漂わせた婦人のすわる姿に、ユリは今にも揺れ出しそうな姿にたとえたのであろう。百合の花ことばは純潔、威厳といわれ、風にそよぎ、ひっそりと気高く咲く百合には、昔から洋の東西を問わず観賞用として広く愛されてきた。また薬用、食用にも利用されてきた。

百合は世界でも最も早く人に知られた花で、西洋では百合はバラと並び、紀元前から人間と関わってきた花である。ギリシャ神話ではゼウスの妃ヘラの乳が飛んで地上に滴ったところから百合が生じたという。ローマ神話でも百合は女神ユノの聖花として讃えられ、希望の象徴、また王位継承者のしるしでもあった。このように百合は美しく、神聖な花としてキリスト教と深く結びついており、聖母マリアの純潔のシンボルとして、聖母マリアの絵に白いマドンナ・リリーが描かれ、彫刻にも刻まれている。受胎告知の絵にも描かれている。結婚式の時には教会の祭壇を飾り、花嫁のブーケにも欠かせない花である。また古代ローマでは百合は希望の象徴であり、百合の花と「ローマ民衆の希望」という文字を刻印した貨幣が多数存在していた。

日本でも古事記や日本書紀に佐由利（さゆり）、左由利、山百合草（やまゆりぐさ）の名が記されている。古事記に次のような記述がある。九州から大和にきた神武天皇は大和の娘、伊須気余理比売命（いすけよりひめのみこと）と出会う。この娘の住居の近くには山百合が咲き乱れ、古代の人々はこれを「さい」といった。この百合のように美しい娘は神武天皇と結ばれ皇后となる。可憐な百合の花にふさわしいロマンチックな物語である。この百合の伝説に基づき、奈良の率川（いさがわ）神社では、今でも毎年6月17日に三枝祭（さいくさのまつり）が行われている。これは「延喜式」にもその規定があるほど古式ゆかしい祭りである。神殿には鱒（そん）の神酒（みき）が捧げられ、神酒と神饌（しんせん）の前で巫女（みこ）たちが舞を奉納する。この時の「さい」の花は今の笹百合（ササユリ）といわれている。三枝の名はササユリが最初の年には一つ、二年目には二つ、そして三年目からは毎年三花を咲かせることに由来している。三枝は幸種（さいぐさ）でもあり、幸福をもたらすものといわれている。

単にユリという名の植物はなく、ユリはユリ科、ユリ属の多年草の植物の総称である。花は三枚のガク片と三枚の花弁があり、種類が多いので花の咲く時期は5月～8月と幅がある。同属は100種あり、15種は日本に自生し、うち7種は日本の特産である。日本は百合の王国といわれるほど多種類の百合が自生する。

夢に見し女神のあとをしたひきてけさわれ見たり百合の花　落合直文

テッポウユリ

種子島から沖縄に自生し、主として海岸の崖などに多い。現在では各地で観賞用に広く栽培されている。花は白で、ラッパ形で花筒が長く横向きに咲く。花の先端は少しそり返っている。芳香が高く、その清楚で純潔なたたずまいを、結婚式やクリスマスのイメージに通い合わせて、季節をこえて盛んに用いられるようになった。沖縄では琉球百合と呼んでいた。関東では鉄砲百合と呼ぶ。花の筒状部が長いので鉄砲に見立て、また鉄砲伝来の種子島より江戸に入ったので鉄砲百合の名がついたという。沖縄では、テッポウユリの鱗茎を容器に入れて食酢少量を加えてつき砕き、木綿の袋に入れて、これを打撲した患部に当て湿布する民間療法が残っている。テッポウユリ系のハカタユリ（名は博多に渡来したことによる）は中国では、百合といえばこのハカタユリを指し、香りが高く球根は高級料理とされている。テッポウユリ、ササユリ、オトメユリ、タカサゴユリがこの系に属す。

断崖の百合に日暮の風移る　河野友人

養正会薬局　（鍵山）

手技療法

熱が急に高くなり、からだや顔がほてってくると、氷枕や氷のうで冷やそうとしますが、反対に手や足、おなかなどは冷えていることが多いようです。熱いところを冷やす前に、まず冷えているところを温めることに努めてください。また、熱のコントロールを司っている三焦経も指圧しましょう。

手足の指の間をもむ

手と足には、多くの経路が集中しているので、手足のマッサージは、からだ全体によい影響を与えます。

発熱したときに手や足の指の間をもむと痛いはずです。しばらくマッサージを続けると熱が下がってきます。

民間療法

鎮静効果のある　タマネギ

頭痛の70％は、筋肉の緊張によるもの、といわれています。タマネギには特有の芳香と刺激成分、硫化アリルがあり、これらにそうした緊張をやわらげる鎮静効果があるのです。

（用法）

タマネギをすりおろし、その絞り汁を杯に1杯ほど随時、飲用します。

知っていますか？ おばあちゃんの知恵

人間の体内で水の占める割合は、普通、体重の五五％から六〇％。ただしそれも年齢によって差があり、子供では七〇％から八〇％あるのに、老人では五〇％程度に減少するそうです。老化とは、まさに体内の水分を失っていくことでございます。だから、常に積極的に水を飲むことが、若さを保つ秘訣だといえます。また、尿を出すことも若さを保つために大事なことです。老廃物を排出しやすくするためには、たっぷり尿を出しましょう。まさに体の中から若返り効果が得られます。

薬剤師　高木　丈夫

こどもの病気シリーズ

おたふくかぜ

おたふくかぜの正式名称は、流行性耳下腺炎。耳の下にある耳下腺がウイルスに冒され炎症を起こし、腫れて、しもぶくれの〝おたふく〟のような顔になるので、おたふくかぜとよばれています。

原因

おたふくかぜは、おたふくかぜにかかっている人の唾液などに含まれる〝ムンプスウイルス〟の飛沫感染のよってうつります。お母さんの免疫が残っているので、生後6ヶ月頃までは、めったにかかることはありません。最もかかりやすいのは2歳～6歳。ピークは4～5歳です。一度かかれば免疫ができて二度とかかることはありません。時に二度かかったという人がいますが、これはおたふくかぜに似て耳の下が腫れる扁桃炎や外耳炎、リンパ節の腫れる伝染性単核症の場合もあります。また反復性耳下腺炎といって耳下腺が何回も腫れる事があります。が、これもおたふくかぜではありません。

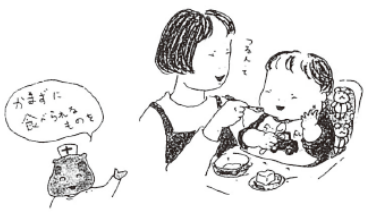
症状

感染して2～3週間位すると頬が腫れて発症します。耳下腺が腫れる場合、片方のみのこともあれば、両側とも腫れることもあります。熱は出ることも出ないこともあります。唾液腺が腫れるため、口を大きくあけたり、物をかんだり、辛い物を食べたりすると痛みます。かまずにすむ柔らかくてのどごしがよいものをあげて下さい。特別な治療法はありませんが、頬の痛みがあるときは、湿布をすると楽になります。また、予防として予防接種を受けることもできます。

感染するとほとんど全員が発症する、はしかや水ぼうそうと異なり、発症する率はおよそ7割。三分の一は発症しないと言われています。しかし、腫れなくても免疫はできています。

思春期以降にかかると、男性は睾丸炎、女性は卵巣炎を起こすことがありますが、不妊になるということは非常にまれだといわれています。

人はうつしやすい期間は、発症前の2～3日から、発症後一週間なので、一週間くらいは外に出ず、おうちでゆっくり過ごしましょう。



養正会薬局　薬剤部